

D-11 主婦の健康度に関する研究 (第2報)

青葉学園短大 久原 澄子

1. 本研究は主婦の生活と疲労状態との関係を調査し、これを検討して、生活指導に役立てることを目的とする。

2. 調査方法は、昭和42年5月15日から21日にかけて、東京都内のS幼稚園児の母親500名にC. M. I. 三重方式による健康調査、自覚的症狀調査、および生活時間調査を行なった。調査資料は正確なもの182を選び、生活環境と生活時間との二つの面から検討を試みた。

3. その結果は、まず生活環境においては、家族構成別にみると、単一家族の愁訴数は複合家族および使用人同居家族よりごくわずかながら少ない結果を示した。家族数においては、5人が一番愁訴数が少なく、5人を越えると愁訴数が高くなる。収入においては1カ月6~8万円の家族の主婦が最も愁訴数が高く、それより収入が多くなるに従って愁訴数は減少に向かい、その傾向は強くなる。つぎに住んでいる場所は、商店街の愁訴数が最も高く、特に精神的愁訴数が高い。室の広さでは1人当り4畳台の愁訴数が最も高く、それより広くなるに従い、低い傾向に向かう。つぎに生活時間においては、生理的生活時間が少なく、家事労働時間が多いものは愁訴数が最も高くなっている。育児関係時間では、これに要する時間が多くなるほど愁訴数が高く、育児関係にはエネルギーを要することを示している。余暇時間においては一定しない。これは他の要因が介在するためにそのような結果が得られたものと考えられる。